会報　和訶羅河
第280号　2024(r06).07.19
城陽の緑と文化財を守る会

無病息災を祈る　夏越の大祓い　荒見神社・水度神社で

年の前半期のけがれを払い、後半期の無病息災を願う「夏越の大祓」が荒見神社（富野）と水度神社（寺田）で行われました。その様子を荒見神社、水度神社の順にお伝えします。

荒見神社　夏越しの祓え・包丁式参加記

卜田　健司

６月３０日（日）、今年も半年が過ぎ凡そ１８０日間、身に付いた数々の穢れを祓う日が来ました。

荒見神社の説明書きでは、大祓（おおはらい）式（夏な越ごし祓）茅の輪くぐり　と標記しているが、各人によって、なごしのはらい　などとも言う。半年間の厄払いと無病息災の祈りをこめて行う神事である。荒見神社で宮司の祝詞奏上の後、出席者が清めのお祓いを受け幣で清めを受け、茅の輪をくぐったり、白い石を３個もち本殿を３回まわると言う所作を行った。なお本殿は、屋根の吹き替え、塗装の彩色をしており、修復に係わった人・物に感謝し改めて心が引き締まる思いであった。

茅の輪（奥では包丁式が行われている）

夏越しの祓えと年越しの祓え（１２月３１日）を併せて大祓とする神事のうちの一つが終り後の半年も皆無病息災である事を願った。因みに茅の輪をくぐるときは各人声を出さずに、となえことば(神拝詞:となえことば)「祓い給え　清め給え　守り給え　幸え給え(さきはえたまえ)」と唱えるそうである。また、茅の輪のくぐり方や唱え言葉は各社の祭神などにより異なるそうである。

庖丁式

包丁を手に鯛にのぞむ

夏越しの祓えの神事に先立ち、拝殿で総持寺山蔭流「包丁式」三曲之鯛が執り行われた。包丁士飛谷拓也氏、後見人樋口誠氏、近藤竜巳氏が後見人の役目と自身の包丁式の役割を担った。みな烏帽子・直垂とという平安時代の装束で順に青・赤・緑の色の装束姿であった。山蔭流の山蔭とは平安時代の貴族四条中納言　藤原山蔭のことで使えた光孝天皇の命で宮中料理の調理法や作法を整えたと言う。

京都市の吉田神社の境内に「料理の神様」と言われる山蔭神社がある。